様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月２０日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０５６４
研究課題名（和文）　近代数寄者の茶会記を素材とする政界・官界・実業界の横断的人脈形成に関する研究
研究課題名（英文）　Research concerning the development of horizontal personal relations among members of the political, government, and business world during the late nineteenth and early twentieth centuries using diaries of tea connoisseurs as sources

研究代表者
齋藤　康彦（SAITO YASUHIKO）
山梨大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：００１５３８２５

研究成果の概要（和文）：　新たに近代の茶会記 60 点余を発掘した。第１次データベースは２万２千件を超え、主要な７百人の生没年、屋号、茶号、流派、学歴、役職歴からなる第２次データベースを作成した。明治ー昭和戦後にいたる近代数寄者のネットワークを確認し、昭和前期に三井財閥を核とする近代数寄者のネットワークが崩壊する一方で、学者・芸術家のインテリ層の茶界への進出や女流茶人の台頭が明らかとなった。なお、研究がなかった関西、中京、金沢の茶界の実態も判明した。

研究成果の概要（英文）：Using over 60 newly discovered diaries of tea connoisseurs during the Meiji and prewar eras, I have produced a primary data base with over 20,000 entries. In addition, I have made second data base listing the dates of birth, ″house names,″ ″tea names,″ affiliation, education, and official position of the most important 700 men. Through this work I have identified a network of tea connoisseurs from the Meiji period to the postwar era. The early the Showa period (1926-36) this network, which centered on the Mitsui zaibatsu, began to crumble, simultaneously, however, scholars and artists among the intellectual elite began to participate more commonly in the world of tea, as did female connoisseurs. I was also able to outline the situation regarding tea connoisseurs in western Japan, the Nagoya area, and the Kanazawa region, which have previously not been studied.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：茶の湯、茶会記、近代数寄者、三井財閥、実業家、高橋箒庵、茶道具商、大寄せ茶会

１．研究開始当初の背景

これまでの日本経済史研究における近代日本の実業家や資産家層の実態把握のための基礎作業としての人的ネットワークの構築は、「資本関係」、「取引関係」、「競争者」といった経済的な側面からのアプローチ一辺倒であった。

それを否定するものではないが、本研究は、これまでの経済史研究では見落とされていた明治中期から昭和前期にかけて紳士の高尚な趣味であり、政界・官界、実業界の要人の多くが嗜み、茶会は現在のゴルフと同じく社交の場として機能していた茶道に注目して井上　馨（世外）をはじめ、益田　孝（鈍翁）、安田善次郎（松翁）、根津嘉一郎（青山）、原　富太郎（三渓）、小林一三（逸翁）、五島慶太（古経楼）らに続く著名実業家達がその中核的部分をになった近代数寄者達の茶会記録である『茶会記』を優良な情報源と再評価して実業家・資産家の実態把握を、従来からの「資本系列」、「取引関係」、「競争者」といった経済的な要素からだけではなく、「趣味世界」という非経済的な要素から形成される人的ネットワークの把握を目指したものである。

本研究を通して社会経済史研究と文化史研究を融合させようとする学際的な試みである。また、茶道史研究においても近代数寄者に関する評論や研究は多い。これらは『茶会記』の記述内容を史料源として再構成したものが主であり、分析視角は茶会でのエピソードを中心に、茶会の様子や茶の湯への造詣、あるいは使われた茶道具や美術品の文化史的な側面での評価に終始し益田孝や根津嘉一郎といった著名な近代数寄者の頂点的、人物論的な検討はあったものの、彼らを取り巻く近代数寄者のトータルな検討はほとんどなされていなかった。

茶道の世界で「五都」とは、東京、京都、大阪、名古屋、金沢の5都市を指す言葉である。筆者の最終目標である近代数寄者の政界・官界、実業界を横断するネットワークの析出には東京だけではなく、京都、大阪、名古屋、金沢での動向やネットワークをも視野に入れておかねばならないだろう。特に、名古屋地方は関東と関西の中間に位置する立地条件から近代数寄者の結節点であると同時に、中京地域をエリアとする独自の近代数寄者の存在が知られているが、そのネットワークの実態は明らかとなっていない。

さらに、昭和 10 年代に近代数寄者の第二世代、第三世代が相次いで没し、第四世代が台頭するが、最後の近代数寄者といわれた松永安左衛門（耳庵）、小林一三（逸翁）、畠山一清（即翁）が形成したネットワークは「茶会記」の公開・刊行が少ないという資料的な制約にもよるが、これまで充分に明らかにされてはいない。

２．研究の目的

明治以降の近代数寄者の茶会記録である『茶会記』ばかりではなく、『日記』、『伝記資料』を有力な情報源として再評価し、近代数寄者を中核とする政界・官界・実業界を横断するネットワークを浮かび上がらせ、その時代的な変遷をトレースするとともに、各時代におけるネットワークの特質、さらには近代数寄者の社会的地位の特質などを立体的に解明する。その際、近代数寄者の政財界における位置を明確にして、近代数寄者の活動が日本資本主義の発展段階に即応していた側面をも明らかにする。

３．研究の方法

（1）まず、全国的規模での近代数寄者の『茶会記』、『日記』、『伝記資料』など近代数寄者の動向を具体的に把握できる資料類の発掘と、写真撮影、筆耕などの方法による資料化を進める。

（2）次いで、資料化された『茶会記』、『日記』、『伝記資料』などから茶会の主催者である亭主、場所、茶客の出席状況などが判明する第一次データベースを作成する。

（3）さらに、完成した第一次データベースから「亭主名簿」、「茶会出席者名簿」など各種の名簿類を作成する。

（4）その後、「亭主名簿」、「茶会出席者名簿」に職業や企業での役職といった近代数寄者の社会的な存在形態が把握できる『日本紳士録』、『銀行会社要録』などの各種「名鑑類」とを相互に突き合わせて、茶人の社会的な存在形態や資産などを記入した第二次データベースを作成する。収集したデータは近代数寄者の生没年、所属会、屋号、通称、茶号、出身地、続柄、流派、師匠、学歴、爵位、議員歴、職歴、経営参画企業名及び役職などである。

（5）構築した第一次、第二次データベースを使用して明治、大正、昭和戦前、昭和戦後の各段階における近代数寄者を中核とする茶会への出席状況、茶客同士の茶会における同席状況などの茶人ネットワーク図を作成する。同時に、和敬会や篠園会といった会員組織の茶会グループの「会員名簿」や茶会活動の情報も取り纏め、別個のデータベースを作成する。

特に、近代数寄者の活動の一つの場として「大寄せ茶会」があり、今日まで続く大師会と光悦会が東西の双璧といわれている。毎回の参会者を悉皆的に把握する。

（6）第一次、第二次データベース、ネットワーク図、「会員名簿」などに基づいて明治、大正、昭和戦前、昭和戦後の各画期におけるネットワークの時代的な変遷と、各時期にお

けるキーパーソンの析出や、その時代的特質を解明する。
（７）判明した社会的な存在形態から政界・官界・実業界の結び付き、会社・企業での役職の兼務状況や企業ごとの系列といった特質を解明する。
（８）なお、大正期に行われた高野山金剛峰寺霊宝館建設、厳島神社平家納経副本作成、「佐竹本三十六歌仙絵巻」の分断事件の三つの出来事は茶会という「場」ではないが近代数寄者のネットワーク形成の一面を把握できる点で興味深いが、トータルな分析はなされていなかった。新たな資料類の発掘により具体的に解明する。
（９）上記の作業を通じて克明な「近代数寄者名鑑」を完成させる。
（１０）主に下記の「茶会記」を使用した。
山本寛『古今茶湯集』
安田善次郎『松翁茶会記』
益田孝『風流記事』
松浦詮「天祥公二百年追善茶会」
野崎広太『茶会漫録』
植村平兵衛『篠園会々記集』
高橋義雄『東都茶会記』、『大正茶道記』、『昭和茶道記』、『大師会展覧図録』、『万象録』
原富太郎『一槌庵茶会記』
住友吉左衛門『御茶会記』
野村徳七『野村得庵茶会記』
畠山一清『即翁遺墨茶会日記』
仰木政次『雲中庵茶会記』
松永安左衛門『茶道三年』、『茶道春秋』、『桑楡録』『わが茶日夕』
小林一三『雅俗山荘漫筆』、『雅俗三昧』、『大乗茶道記』、『小林一三日記』
光悦会『光悦会の歩み』
越沢宗見『茶道聞き書き抄』、『宗見茶話集』
『富田重助重慶日記』、『富田家日記』
『好日会会記』、『敬和会茶会記』

４．研究成果
（１）これまで未確認であった『茶会記』や『日記』を新たに発掘して、資料化した。また、研究方法に例示した各種のデータベースを構築し、ネットワーク図、会員名簿を多数作成した。各種のデータベースは精査の上、Ｗｅｂ上で公開する。
（２）平成２１年度末までに研究課題に直接関わる５本の学術論文を発表した。さらに明治～昭和戦後期にいたる近代数寄者の活動とネットワークに関係する学術論文の執筆を継続し、順次、発表していく。
（３）茶会の亭主や出席者の名前が判明する近代以降の『茶会記』は本研究開始前の４倍の８０冊が確認され、茶会出席状況の情報である第一次データベースは２万２千件を超えた。
（４）今回の資料調査で、従来、充分に把握できなかった三井八郎右衛門や住友吉左右衛門といった財閥の当主クラスの茶会活動が明らかとなり、また、『茶会記』が一般に公開されていないケースが多い関西・中京・金沢地域での茶界の実態が解明された。さらに、岡山、松江、仙台といった近世期に茶の湯が盛んであった地域の近代以降における動向も確認しえた。
（５）野崎広太『茶界漫録』、山本寛『古今茶湯集』、安田善次郎『松翁茶会記』、益田孝『風流記事』などから近代数寄者が台頭する以前の明治３０年代に活動していた和敬会を中心とする茶道低迷期の実態が明らかとなった。
　具体的には明治３０年以前の亭主は７２人、茶客数は４８５人を数える。また、安田善次郎『松翁茶会記』によって活動の全てが確認できる和敬会の活動は６４人の亭主が、延べ３７７人の茶客を招いていた。活動の中心は益田孝、安田善次郎、松浦詮の３人であり、和敬会の発足当初は旧大名、公家、江戸時代から著名であった大商人を中心としていたが、それら天保期生まれの第一世代の死去にともなって活動の中心が順次、新興の実業家層に取って代わられていった。近代数寄者はまったく新しい社会階層から生み出されたことを実証した。
（６）大寄せ茶会である明治２９年に始まる大師会、大正４年の光悦会の設立時の役員、毎年の茶会の席主名など、具体的な実態が解明された。今回の検討を通じて大師会と光悦会において席主の半ばを東京及び関西地方の茶道具商が占め、実業家を押さえて首位に立ち、これまで表面に出てこなかった茶道具商の活動と、近代以降の茶界に果たした重要な役割が浮き彫りになった。この構造は戦後段階になっても基本的に変化はなかった点が確認された。
（７）データベースの検討によって、明治・大正・昭和戦前・昭和戦後の各段階におけるネットワークが析出され、大正末年に、明治維新前後に生まれた第四世代の台頭という世代交代の実態が確認された。しかし、戦後段階になると新たな近代数寄者の登場は激減した。
（８）近代数寄者のキーパースンは高橋義雄、益田孝、根津嘉一郎の 3 人が浮かび上がり、近代数寄者が形成したネットワークは既存の財閥の枠を越えた交流も確認された。益田孝が千利休や古田織部の再来の大茶人といわれる事実を裏付けていよう。
　特に益田が主催した大師会の招待者には日本銀行総裁を務めていた三菱財閥の総帥岩崎弥之助、一代で安田財閥を築いた安田善次郎、大倉組の大倉喜八郎、森村組の森村市左衛門、美術品蒐集家として知られ赤星相場で名高い赤星弥之助といった著名人が、財閥

の枠を越えて並んでいる。
（９）特に、昭和前期になると、それまで近代数寄者の中核を占めていた益田孝、高橋義雄、馬越恭平、団琢磨といった三井財閥を中心とする茶人ネットワークが崩壊し始め、インテリ層や益田多喜、松永一子、仰木美代、畠山外美といった女流茶人の台頭が著しくなった実態が浮き彫りとなった。これは第四世代では茶会への夫人同伴が一般化していった動向による。これが、前述した女流茶人の台頭に結果するのである。戦後段階になって顕在化する女性層を中心とする茶道の興隆の前提条件となったことが確認された。
（１０）益田孝を中心とする東京を基盤とする関東の茶界には全国各地からの茶客も登場して開かれているが、三千家を始めとする茶道の諸流家元はほとんど登場していないことが判明した。一方、関西地域では十八会、篠園会、桐蔭会など、茶会活動が基本的に会員制で閉じられているが、篠園会を指導したのが藪内竹窓であり、桐蔭会は裏千家がバックに控えているなど諸流家元との交流が深いことが判明し、東西茶界の性格の大きな相異が明確となった。また、中京地域では富田重助の実業家グループと茶道具商グループが重層的に展開し、また、益田孝の影響が大きく、東京、関西両地域との交流も深かった。東京と中京圏をつなぐ結節点の役割は森川勘一郎が果たした。さらに、金沢地域の近代数寄者は近世以来続く大商人層であったなどが判明した。金沢地域では越沢宗見が東京との結節点の役割を果たした。
（１１）データベースの構築により根津嘉一郎や高橋義雄が推進した高野山金剛峰寺霊宝館建設事業や厳島神社平家納経副本作成事業など近代数寄者を中心とする社会文化活動の具体的な内容が悉皆的に明らかとなった。これらの事業には日本全国の近代数寄者が動員されている。
　特に、高野山金剛峰寺霊宝館建設事業では120 人を数える寄付者に三井八郎右衛門、古河虎之助、岩崎久弥、住友吉左衛門など安田財閥を除く既成の大財閥の当主が多数名前を連ねている。
（１２）政界・官界・実業界を横断する人的ネットワークの中では、井上馨を除いた政治家や官界出身者の近代数寄者は極端に少ない。事実、政界や官界で近代数寄者は１割に満たなかった。
（１３）今後は、畠山一清『即翁遺墨茶会日記』、仰木政次『雲中庵茶会記』、松永安左右衛門『桑楡録』、『わが茶日夕』、小林一三『小林一三日記』を使用して、戦後段階における茶界の分析を進め、最終的には『（仮称）近代数寄者のネットワーク』として取り纏めたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 齋藤康彦、近代数寄者の地域的展開―関西・中京・金沢―、山梨大学教育人間科学部紀要、査読無、１１巻、2010、329－341

② 齋藤康彦、近代数寄者の世代交代―第四世代の登場―、山梨大学教育人間科学部紀要、査読無、１１巻、2010、314－328

③ 齋藤康彦、近代数寄者の大寄せ茶会と社会文化事業、山梨大学教育人間科学部紀要、査読無、１０巻、2009、299－312

④ 齋藤康彦、茶の湯の復興と近代数寄者の台頭、山梨大学教育人間科学部紀要、査読無、１０巻、2009、287－298

⑤ 齋藤康彦、近代数寄者のネットワークと存在形態―高橋箒庵「茶会記」を素材にして―、山梨大学教育人間科学部紀要、査読無、９巻、2008、304－318

〔その他〕
ホームページ等
http://erdb.yamanashi.ac.jp/rdb/A_DispInfo.Scholar?ID=990876E2DDBC3101

http://ci.nii.ac.jp/naid/110007230049

http://ci.nii.ac.jp/naid/110007230048

http://ci.nii.ac.jp/naid/110006782543

６．研究組織
(1)研究代表者

齋藤　康彦（SAITO YASUHIKO）
山梨大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：00153825

(2)研究分担者
該当なし

(3)連携研究者
該当なし